

【幼児教育支援センターによるプロジェクト報告 1. 子育て支援プロジェクト】

## 子育て支援活動としての親子クッキング —サービス・ラーニングとしての実践—

Parent-Child Cooking as a Child-Rearing Support Activity:  
Practical Implementation as a Service Learning

増田啓子<sup>1)</sup>, 富田エミ<sup>1)</sup>

MASUDA Keiko, TOMITA Emi

<sup>1)</sup> 常葉大学保育学部

### 要旨

サービス・ラーニングは、学生が学業の一環として、地域や社会に奉仕活動を組み合わせる学習手法である。子育て支援活動としての親子クッキングの開催にあたり、計画段階から学生の参画を促し、サービス・ラーニング・プログラムの構成要素にのっとり実施した。事後のアンケートにより、学生は活動を通して保育の実践力と奉仕活動の意義を学び、今後の社会貢献活動に意欲を示すことができた。

キーワード：サービス・ラーニング、子育て支援、親子クッキング

### I はじめに

常葉大学の附属機関である幼児教育センターは、保育者を目指す学生を対象に、感性豊かで温かな人間性を持ち、高い専門性を身につけた、現代社会が求める「子どもと家庭を支える専門職者」になるために総合的な支援を行っている<sup>1)</sup>。その一環として、令和5年に地元地域のための多様な子育て支援を企画・提供する拠点をつくることを目指し、大学保育学部・短期大学部保育科の教員は子育て支援プロジェクトチームを立ち上げ、令和5年に子育て支援プロジェクトを開始した。

筆者らが企画したプロジェクトは令和5年6月に実施した「親子体操」、8月に実施した、「親子クッキング」があるが、本報告では、8月に実施した「親子クッキング」における実践とその経過を報告することとする。これまで、学生の社会的能力を発展させる教育法としてのサービス・ラーニング・プログラムの実践を、保育者養成課程において実施することを模索してきたが、本報はその実践について報告するものである。

### II サービス・ラーニングとは

#### 1. 日本におけるサービス・ラーニング

文部科学省は、高等教育改革において、社会の期待に応える大学教育を推進する方策の一つとして、アクティブ・ラーニングの充実をあげている<sup>2)~4)</sup>。アクティブ・ラーニングとは、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法（発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習をはじめ、教

室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等を含む教育方法)をいう<sup>5)</sup>。

その体験的な手法の一つに、本研究のテーマであるサービス・ラーニングがある。日本の高等教育機関におけるサービス・ラーニングは、国際キリスト教大学の海外活動を始まりとする大学主導型から、文部科学省のGPや知の拠点事業等に採択されて資金援助を受けることで、広く大学で取り入れられてきた。その内容は、ボランティア活動やインターンシップ等と連動したものが多く、ボランティア活動との明確な区別がないものもあるが、その教育効果から様々な大学等で実施されてきた。近年、日本の多くの大学で、サービス・ラーニングが導入されており、文部科学省の特色GPと現代GPの採択においても、サービス・ラーニングを含むものが漸増している。しかし、「サービス・ラーニング」という名称であっても、大学によって、カリキュラムの内容は様々であり、日本では独自の発展を遂げている途上といえよう。

筆者らの所属する保育学部は、保育士・幼稚園教諭などの、幼児教育・児童福祉の専門職養成を使命としており、児童福祉施設と家庭において、保育に関わる様々な支援を乳幼児及びその保護者に行っている。さらには、保育に関する知識・技術を科学的論拠に基づき理解し、それを生かす実践力を習得することが重要であり、今回の子育て支援プロジェクトは実践の場として適切であると考えている。

米国では、家族・消費者科学者が専門的な知識・技能を地域社会の活動に生かし、市民的責任や社会的役割を学ぶことを目的にサービス・ラーニングを取り入れ、高等・中等教育で成果を上げている<sup>6)</sup>。筆者らは、保育者養成に社会貢献を視点とするサービス・ラーニングを取り入れることで、幼児教育・児童福祉専門職の養成により有効な教育プログラムを企画し、実施・評価したいと考えた。

以上の考えにより、子育て支援プロジェクトの遂行にあたりサービス・ラーニング・プログラムの実践を試みた。

## 2. サービス・ラーニングの構成要素

アメリカはサービス・ラーニング発祥の地であり、アメリカの学校教育に、サービス・ラーニングが導入された経緯は、市民教育のための教育形態として注目された事に始まる。1980年代、知識偏重室型の学習から、Dewey (1915) の「実社会と結びつけた体験学習」を理論的基盤とする、地域社会へ学びを広げる体験型学習への変化があった<sup>6)</sup>。1983年には、Boyerが初等・中等教育を含む公立学校でのサービス・ラーニングの必修化を提唱し<sup>7)</sup>、1985年には大学教育に、学生の社会貢献活動を取り入れる「キャンパス・コンパクト (Campus Compact)」という連合体が設立され多くの大学で導入されていった。さらに、1990年には、「国家及びコミュニティ・サービス法」が制定され、市民に社会貢献活動への参加を促す取り組みが広がっていった。なお、コミュニティ・サービス法では、サービス・ラーニングの構成要素、構成するための基礎的条件として、表1、表2の各4項目をあげている<sup>8)</sup>。

表1 サービス・ラーニングの構成要素

①	コミュニティのニーズにあったサービス
②	教科・科目と関連し、学習効果が期待できる内容
③	市民性(公民としての資質)を涵養する内容
④	参加者にサービス活動の経験を“振り返る”場の設定

表2 サービス・ラーニングの構成要素と段階

①事前準備 Preparation	実践的学習のための技術の習得・研修・調査・ パートナーシップの開発
②活動 Action Service	プログラム参加者が、コミュニティ(地域社会)の ために意味のあるサービス活動(ボランティア活動)を実施
③振り返り Reflection	経験を深め、再構築の学習、学びの深化 ポートフォリオ等の利用
④お祝い Celebration	参加者やコミュニティ(地域社会)に活動の成果を示し、 パートナーとの一体感や連携を深める

出典：表1、表2とも増田啓子・田崎裕美(2019)「高等教育における社会貢献カリキュラムの構築」  
常葉大学保育学部紀要, 6, 11-21<sup>9)</sup>

### Ⅲ 本プロジェクトにおけるサービス・ラーニングの実施

#### 1. サービス・ラーニング・プログラムの構成要素の確認

まず、①コミュニティのニーズにあったサービスであるかについては、地域貢献を目指す活動として問題なく適合していることを確認した。②教科・科目と関連し、学習効果が期待できるかについて、幼い子どもとの交流が保育・教育実習に役立つばかりでなく、家庭支援の観点からも役立つ内容であると評価できる。③市民性(公民としての資質)を涵養するかについては社会貢献を意識させ市民として役立つことの意義について事前準備の中で学び、社会人としての自覚を持つことに役立つと考えられる。④参加者(学生)にサービス活動の経験を振り返る場の設定では、実践後の発表・振り返りのアンケートを実施した。

#### 2. サービス・ラーニングの構成要素と実施内容

サービス・ラーニングの構成要素に従い、以下の通り実践を進めた。

##### (1) 事前準備：実践的学習のための技術の習得・研修・調査・パートナーシップの開発

- ・常葉大学幼児教育センターにおける子育て支援プロジェクトの意義について学び理解した。
- ・先に実施した親子体操の実施での問題点を振り返り、改善方法について検討した。

- ・講師を招き、パン生地の作り方、パンの焼成について実践した。
- ・実際の会場を下見し、どのような環境構成が必要かを、教員と学生で検討した。
- ・当日必要となる役割分担を考え、担当を決めた。

**(2) 活動：コミュニティ（地域社会）のためのサービス活動（ボランティア活動）**

- ・会場準備、材料の準備、参加者の駐車場からの案内、会場での受付を行った。
- ・クッキング活動への導入として、絵本の読み聞かせを行った。
- ・親子と触れ合い、一緒にパン作りを行った。
- ・パンの焼成（別室にて実施）を行い、親子に配付した。
- ・後片付けを行なった。
- ・当日平行して行われたオープンキャンパスに大学を訪問した高校生の見学案内を務めた。

**(3) 振り返り：経験を深め、再構築の学習、学びの深化**

- ・保育実践演習の授業内で各自の活動内容について報告した。
- ・ウェブによるアンケートを実施し、学びの検証を行った。
- ・当日の情報や写真を共有し、記録をポートフォリオとしてまとめた。

**(4) お祝い：参加者やコミュニティに活動の成果を示し、パートナーとの一体感や連携を深める**

学生同士がペアとなり、オリジナルの賞状を作成し努力をたたえ合った。互いに活動の報告をし、情報を共有することにより、新たな学びがあったばかりでなく、ペアとなった学生相互の交流を深め、ピアサポートにも繋がった。



写真1 事前打ち合わせ



写真3 パン生地作りの準備



写真4 親子との交流



写真5 お祝いの賞状作り

### (5) 親子クッキング担当学生のアンケートより

プロジェクト参加学生を対象に、振り返りとしてウェブによるアンケートを行った。参加学生の回答で際立ったものは、活動への参加に対する満足度が高かったことである。すべての学生の満足度は高く、次回への意欲を示し、楽しかったと回答した。活動を通じて学んだ事は、「子どもの理解」「保護者の理解」「プロジェクトの意義」「地域貢献の意義」「必要に応じて自ら動くこと」「保育職のキャリア理解」などが半数以上からあげられた。その他「安全・清潔の必要性」「協力体制のあり方」についても回答があった。

活動の時間としては、「丁度良い」の回答が多かったが、1名が「長かった」と回答しており、その学生は自宅からの通学を含めて6～8時間の拘束時間があつたようである。その他の学生は6時間以内の活動時間であり、「丁度良い」と回答した。今後の活動は学生の負担を考え、6時間以内に収めるのが良いかと考察された。

### (6) オープンキャンパス運営担当の学生アンケートより

プロジェクト当日はオープンキャンパスも実施しており、11名の学生が高校生と保護者に対し、学内ツアーを行った。運営側としてプロジェクトに関わつた学生の満足度は高かつた。詳細な計画の項目には人の配置や経過時間の把握などがあり、多くの人々が運営に関わり実現していることを知つた。そして、円滑な運営の難しさや計画の重要性を学ぶことができた。また、学内ツアーでは改めて大学について知る機会となつた。高校生からの質問にしっかり答えることができたことへの達成感や保護者の前で説明できたことはよい経験であつたと回答した。

子育て支援プロジェクトそのものを初めて観る学生からは、プロジェクトがどのようなことなのか分かつた、実際に観ることが出来てよかつた、などの回答があり運営を通して具体的なイメージにつなげることができた。プロジェクトの重要性については、パンを作る過程を親子で一緒に経験することにより絆が深まること、教室に参加した親同士のコミュニケーションが悩みを相談する場となることを知り、子育て支援プロジェクトの重要性を知ることができたと回答した。

一方、プロジェクトのサポートにあたり不安を感じたことでは、学内ツアーの時間配分や内容の伝え方に対する不安が多くあげられた。さらに、室内で子どもへのサポートをした学生からは、実習では子どもだけと関わるため、親子の間にどう関わっていくべきか戸惑う回答もあつた。今後はこれらを想定した事前の練習や事例の把握による対策の必要性が考えられた。学内ツアーの改善点では、授業中の楽しい出来事をもう少し詳しく写真などで伝えられたらよかつた、大学生と高校生がゆっくり話せる時間があるとよかつた、など今後に活かせる回答があつた。

今回の活動で、運営側の仕事を体験し学内ツアーを通して高校生やその保護者に対しコミュニケーションを図れたことは良い経験となつた。また、親子クッキングでは、保育実習等とは異なる環境で親子の様子を観る子ができ、子育て支援プロジェクトの機会の提供と重要性について理解を深めることができた。

#### IV おわりに

社会貢献活動に参画するサービス・ラーニングは、学生の教室での学びを実践力へと昇華することが出来る。実践と学びを結びつけることにより、実践力を高め、学習への意欲が高まることが今回の実践で明らかとなった。また、何より学生が楽しめる活動であることも注目される。当初は参加について消極的であった学生もいたが、実施後には全員の学生が今後の活動への意欲を示し、地域貢献への参画の意志が強まったことも成果として大きいと思われる。今回、大学内でこのような実践が出来たことは、安全面や交通費負担の点でも望ましいと考えられる。短期大学部保育科で長年実践されている子育て支援活動のように、今後はサービス・ラーニングを授業に取り入れ、実践することを視野に入れても良いのではないかと考えた。

今後の課題としては、「お祝い」をする場として地域の方と成果や学びを共有する場を作ることが出来なかった。今後はこの活動を継続することにより、地域の子育て家族との関係作りが構築できればと考える。米国と比較して日本の教育課程では、学生を報奨する場が少ないように感じている。今後は子育て支援活動の実践に、互いの謝意を伝え合うような交流の場を構築しても良いのではないかと考えた。その他、意義のある活動でありながらも、遠方から通学する学生の時間や交通費の負担や、アルバイトによって学費を充当している学生にとって休日の実施は参加が難しいなどの課題がある。それらを解決する方策を考えつつ、この活動が継続できることを希望する。

#### 謝辞

本プロジェクトの広報等の事務作業を担当してくれた幼児教育センターの職員の皆様に厚く御礼申し上げます。また貴重な休日に、本プロジェクトに快く参画した学生に謝意と敬意を表します。

#### 引用文献

1) 常葉大学ホームページ、幼児教育センター

<https://www.tokoha-u.ac.jp/facilities/student-support/early-childhood-education-support-center/> (2023.11.27 閲覧)

2) 文部科学省 (2002) 中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について

3) 文部科学省 (2012) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～

4) 文部科学省 (2015) 第2部 文教・科学技術施策の動向と展開 第5章 高等教育の充実、平成27年度文部科学白書, p.214.

5) 文部科学省 (2012) 用語解説, p4,17

6) 中里陽子, 吉村裕子, 津曲隆 (2015) 「サービス・ラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について」『アドミニストレーション』第22巻, 第1号, p.165.

7) Boyer E, L. (1983) *High School: A Report on Secondary Education in America*. New York

- 8) 再掲 6) (2015) pp.164 – 181.
- 9) 増田啓子, 田崎裕美 (2019) 「高等教育における社会貢献カリキュラムの構築」『常葉大学保育学部紀要』  
6, pp.11-21.